

「遊びの都市」の継続的関わりが住まいの教育にもたらす効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-07-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00062792

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



研究成果報告書

テーマ：「遊びの都市」の継続的関わりが住まいの教育にもたらす効果

兵庫教育大学 助教 花輪由樹

1. はじめに

近年は、進学や就職、結婚、転勤など、ライフステージ毎に住む場所が変わる可能性があり、必ずしも同じ場所に定住し続けるとは限らない。たとえ住む場所が変わったとしても、そこで自分なりに場所との関係性を築くことができる力を養成することは今後の住教育において重要な視点である。その際、ニュータウンのように自分が住む場を新しく創造していく力と同時に、歴史や文化等に配慮しながら住まいを再創造できる力も求められていく。

このような中で本研究は、「自分事として住まいのあり方を考える機会」が学校外にどのように存在しているのかに注目し、子どもが仮想都市を創る「遊びの都市」に焦点をあてた。これは、子ども達が仮想都市内で職業体験・消費体験・市民体験等を行う活動で、小学生から大学生、大人、高齢者まで、地域の人々も関われる仕組みがある。特に参加主体となるのは小学生の子ども達であり、子ども自身がどのような「都市」をつくりたいかを考え、その子どもの主体的活動を中高生や大学生、若者がサポートしていく仕組みとなっている。彼らの中には、かつて子ども時代に主体的に「都市」を創り遊んだことがある経験者もいる。

そこで本研究は、日本各地の「遊びの都市」において、子ども時代に遊んだ経験をもつ者が再びサポーターとして参加する実態を探り、このように継続的に「住まいのまちづくりに取り組む」機会があることは、どのような教育的効果をもつのか示唆を得ることを目的とした。

具体的には下記の方法で調査を進めた。

【調査1】日本各地の「遊びの都市」において、経験者をサポーターとして参加させている「都市」を選定し、どのように参加させる仕組みが存在するか実態調査により探った。

【調査2】経験者が、なぜ「遊びの都市」活動に関わり続けるのかインタビュー調査を行った。インタビューの際は、対象者に他の対象者を紹介してもらいスノーボールサンプリング法を採用した。

【調査3】「遊びの都市」への継続的な関わりが、住まいの教育にもたらす効果を考察した。

2. 研究成果

(1) 調査地の選定 (調査1)

まず調査地の選定については、2010年4月に刊行された『こどもがまちをつくる』（萌文社2010）を参考にした。ここには2010年時点で「遊びの都市」が29地域存在していることが確認されている。

近年これはさらに広がり、全国に約200地域の「遊びの都市」が存在してきていることが、2018年全

国主催者サミットで確認されている。「遊びの都市」は小学生を対象とすることが多く、彼らが経験者としてスタッフ側にまわるには、高校生や大学生の年齢になるまで待つ必要がある。そこで本研究は、2010年時点で把握されていた29地域の「都市」のうち、2019年時点でも開催され続けている「都市」に注目し、これがどの程度存在しているのかインターネット検索で探った。

その結果、29地域のうち15地域の「都市」が開催され続けていることが明らかになった(表1参照)。表1をみると、初期の日本の「遊びの都市」は「仙台こどものまち」や「ミニさくら」など2002年より開始されており、2019年時点では17年が経過している。また2009年より開始された「とさつ子タウン」は、2019年時点で10年経過していることになる。つまり、当時小学生だった6歳～12歳の児童は、10年の経過で16歳～22歳、17年の経過で23歳～29歳の年齢になっているのである。

さらに、この15地域の「遊びの都市」の概要をインターネット検索において探った(表2参照)。表2をみると、2019年の【開催日】は、8月や3月など春休みや夏休みを利用した実施が多い。また【対象】は主に小学生ではあるが、15地域のうち8地域が小学生の年齢を超えても参加可能な状況になっていることが分かった。

【参加費】については、8地域ほどが300円～500円を中心としており、最高額は2500円であった。【開催場所】は、幼稚園や大学などの教育機関や、公園や公民館、商店街など地域の施設といったように様々な場所がみられた。【主催団体】は、実行委員会形式で様々な人が集まれる状況にしていたり、子ども関係のNPOによるものであったり、行政主催のものもみられた。

本研究ではこれら15地域のうち、調査が可能であった2地域に訪れ、実態調査を行った。1つ目は2006年より開催の「①ミニさっぽろ」(北海道札幌市)であり、2つ目は2009年より開催の「②とさつ子タウン」(高知県高知市)である。また15地域の中には掲載がないが、2009年より開催の「③あいちマーブルタウン」(愛知県岡崎市)と、2010年より開催の「④なごや★子どもCity」(愛知県名古屋)への調査も行った。

また本研究は山梨県の研究助成を受けているため、山梨でも広まっている「遊びの都市」に類似する活動として、「⑤ミニ山の都」「⑥子ども夢の商店街」「⑦キッズタウン南アルプス」の実態調査も行った。なお本調査では3月実施の「遊びの都市」も探る予定であったが、新型コロナウイルスの影響により中止になったため①～⑦の調査データより、分析及び考察を行った。

①～⑦の「遊びの都市」の概要は表3のとおりである。なお、「⑥子ども夢の商店街」「⑦キッズタウ

表1 2010年に把握されていた「都市」

開始年	名称	2019年時点の開催有無	
1	2002	仙台こどものまち	○
2	2002	ミニさくら	○
3	2003	ミニいちかわ	○
4	2003	ピンポン横丁	×
5	2004	羽鳥子どもの町	×
6	2004	こども四日市	○
7	2005	キッズハッピーよこ町	×
8	2005	ミニたまゆり	○
9	2006	ミニさっぽろ	○
10	2006	だがねランド	×
11	2006	チャキッズタウン	×
12	2007	ピノキオマルシェ	○
13	2007	むさしのミニタウン	×
14	2007	ミニたちかわ	×
15	2007	ミニヨコハマシティ	○
16	2007	なごみん横丁	○
17	2007	キッズタウンなかむら	×
18	2007	ミニ大阪	×
19	2007	ミニたからづか	○
20	2008	ミニまつぶし	○
21	2008	ミニそうか	×
22	2008	キッズタウンいたばし	△(別名開催)
23	2008	ミニまほろば	×
24	2008	ミニ★大阪	○
25	2008	こどものまち高砂	○
26	2009	イツアスモールCBT	○
27	2009	未来ぼ～ろ	×
28	2009	とさつ子タウン	○
29	2010	ミニ★シティ	×

ン南アルプス」については職業体験などを軸にしているため、必ずしも「遊びの都市」の枠組みが主催者によって重視されているわけではないことが分かったが、「遊びの都市」に類似する活動として本研究では取り上げ、「遊びの都市」活動の継続性に関する考察にヒントを得るものとする。

表2 2019年時点で継続実施されている「遊びの都市」の概要

【開始年】	【名称】 (所在地)	【開催日】 (2019年～2020年)	【対象】	【参加費】	【開催場所】	【主催団体・企画団体】
1 2002	仙台こどものまち (宮城県仙台市)	不明 (2020年も開催予定)	小学生	不明 (1000円)	みどりの森幼稚園	こども未来フォーラム
2 2002	ミニさくら (千葉県佐倉市)	2020年3月20日～22日 (コロナの影響で中止)	小学生	500円 (3日有効)	中志津中央商店街	特定非営利活動法人NPO子どもまち
3 2003	ミニいちかわ (千葉県市川市)	2019年9月7日～8日	小学生～18歳	1日500円	昭和学院短期大学・行徳駅前公園会場	特定非営利活動法人NPO法人市川子ども文化ステーション
4 2004	こども四日市 (三重県四日市市)	2019年11月2日～3日	小学生	1日500円	すわ公園交流館	こども四日市プロジェクト
5 2005	ミニたまゆり (神奈川県川崎市)	2020年2月8日～9日	5歳～15歳	1日500円	田園調布大学	田園調布大学
6 2006	ミニさっぽろ (北海道札幌市)	2019年10月5日～6日	小学校3年生～4年生	1日2500円	アクセスサッポロ	ミニさっぽろ2019実行委員会
7 2007	ピノキオマルシェ (千葉県柏市)	2019年10月13日～14日 (台風の影響で中止)	小学生	1回300円	柏の葉キャンパス駅周辺	ピノキオプロジェクト2019実行委員会
8 2007	ミニヨコハマシティ (神奈川県横浜市)	2019年3月30日～31日 (2020年は4月4日、5日で開催予定だったがコロナの影響で中止)	19歳以下	1日300円 2日で500円	港北みなも	NPO法人ミニシティプラス
9 2007	なごみん横丁 (愛知県岡崎市)	2019年8月6日～8月9日	小学校1年生～6年生	100円 (4日有効)	岡崎市北部地域交流センター・なごみん	主催：岡崎市 企画運営：特定非営利活動法人 岡崎まち育てセンターりた
10 2007	ミニたからづか (兵庫県宝塚市)	2019年12月14日～15日	小学校2年生～18歳	不明	フレミラ宝塚	大型児童センター
11 2008	ミニまつぶし (埼玉県北葛飾郡)	2020年3月28日 (コロナの影響で中止)	年長 (新1年生)～18歳	1日300円	B&G海洋センター・中央公民館	松伏町 教育文化振興課
12 2008	ミニ★大阪 (大阪府堺市)	2019年3月28日 (コロナの影響で中止)	小学校1年生～高校生	800円	堺市中区役所	ミニ★大阪プロジェクト実行委員会
13 2008	こどものまち高砂 (兵庫県高砂市)	2019年10月26日～27日	小学校1年生～6年生	1000円	高砂市文化会館・文化保健センター	特定非営利活動法人 高砂キッズ・スペース
14 2009	イツアスモールCBT (千葉県千葉市)	2019年8月23日～25日	小学校1年生～18歳	400円 (3日有効)	千葉市子ども交流館	千葉市こどものまちCBT実行委員会
15 2009	とさっ子タウン (高知県高知市)	2019年8月17日～18日	小学校4年生～中学校3年生	1000円	高知市文化プラザかるぼーと	とさっ子タウン実行委員会 /高知市市民活動サポートセンター/NPO法人NPO高知市民会議/公益財団法人高知市文化振興事業団

表3 調査対象の7地域の「遊びの都市」の概要

【名称（所在地）】	【開始年】	【2019年の開催日】 （本研究の調査日）	【対象】	【参加費】	【開催場所】	【主催団体】
①ミニさっぽろ （北海道札幌市）	2006年	2019年10月5日～6日 （調査日：同上）	小学校3,4年生	1日2500円	アクセスサッポロ	ミニさっぽろ2019実行委員会
②とさつ子タウン （高知県高知市）	2009年	2019年8月17日～18日 （調査日：同上）	小学校4年生 ～中学校3年生	1000円	高知市文化プラザかるぼーと	とさつ子タウン実行委員会/高知市市民活動サポートセンター/NPO法人NPO高知市民会議/公益財団法人高知市文化振興事業団
③あいちマーブルタウン （愛知県岡崎市）	2009年	2019年11月23日～24日 （調査日：11月23日）	小学生	無料	籠田公園	NPO法人コラボキャンパス三河
④なごや★こどもCity （愛知県名古屋市）	2010年	2019年11月3日～4日 （調査日：11月4日）	小学校1年生 ～高校生	無料	名古屋国際会議場レセプションホール	特定非営利活動法人子ども&まちネット
⑤ミニ山の都 （山梨県甲府市）	2019年	2019年9月15日～16日 （調査日：同上）	小学校1年生 ～小学校6年生	無料	甲府南公民館	一般社団法人甲府青年会議所
⑥こども夢の商店街 （山梨県南アルプス市）	2019年	2019年11月2日～3日 （調査日：同上）	小学生	無料（仕事登録料300円、出店料600円）	DCMくろがねや南アルプス店会場	こども夢の商店街実行委員会
⑦キッズタウン南アルプス （山梨県南アルプス市）	2009年	2019年11月16日 （調査日：同上）	小学生	1000円	若草生涯学習センター	南アルプス市商工会青年部

(2) 継続的に参加させる仕組み（調査1、調査2）

7地域の「遊びの都市」を対象に、参加対象外になった人達をどのようにスタッフなどの裏方として参加させる仕組みがあるか、また参加している人達はどのような意識で参加しているのか実態調査を行った。以下では、「①ミニさっぽろ」「②とさつ子タウン」「③あいちマーブルタウン」「④なごや★こどもCity」「⑤ミニ山の都」「⑥こども夢の商店街」「⑦キッズタウン南アルプス」の順にその実態をみていく。

①ミニさっぽろ

これは2006年より札幌市によって行われ、現在は「ミニさっぽろ実行委員会」が主催となっている。実行委員会は、「札幌市」や「札幌商工会議所」、「札幌市民憲章推進会議」、「(一財)札幌産業流通振興協会」、「(公財)さっぽろ青少年女性活動協会」、「(公社)札幌市子ども会育成連合会」によって構成されている。「ミニさっぽろ2019」のボランティアスタッフは116名で、その多くが実行委員会の組織の1つである「(公財)さっぽろ青少年女性活動協会」から流れてきている。また近年は進路との関連で、高校生の参加も増えている。このスタッフの中には、小学校3,4年生の頃に遊んだ経験をもつ者もいる。

本調査でインタビューできたのは、計12名（高校生10名・大学生2名）で、そのうちの1名は参加対象であった小学校3,4年生の時に参加したわけではなく、「子どもボランティア」というポジションで小学校6年生の時に参加した者であった（スタッフL）。今回スタッフとして参加しようと思った動機として、子どもの頃に経験した場に再度関わりサポートしたいという者（スタッフB, D, G, H, I, K）や、子どもの頃から裏方に憧れを抱いていた者（スタッフF）や、今後の進路との関係でボランティアや子どもとの関わりの経験値を上げたい者（スタッフA, D, J, L）がいた。

また、「ミニさっぽろ」の経験者が今後もどのように関わり続けていく可能性があるかという視点で

みたときに、「子どもボランティア」（各日 30 人・計 60 人）の存在にも注目できる。「子どもボランティア」は、「ミニさっぽろ」の元参加者で、小学校 5, 6 年生を対象に抽選（倍率 2 倍）で選ばれる。選ばれた子ども達は、当日裏方として活躍する存在となっている。「ミニさっぽろ」には約 60 ブースが出店し、様々な企業が子ども向けのプログラムを提供するため、通常は子どもが裏方になることはない。しかし「子どもボランティア」は、食事エリアなど実行委員側がつくるブースで、メニュー開発など提供側にたった役割を、子どものうちから担うことができる。したがって、昨年まで参加者側であった人達を、すぐに裏方に採用していくシステムがあるのが「ミニさっぽろ」の特徴といえる。また多くの「都市」では、対象参加者を小学生としているため裏方スタッフとして声をかけていくのは中学生以降になることが多い。しかし中学生になると部活動が始まり生活スタイルが変化することから、「遊びの都市」への参加をやめてしまう子どももいる。しかし「ミニさっぽろ」の場合は、小学校 3, 4 年生のみを対象としているため、まだ生活スタイルが大きく変化しない小学校高学年のうちから裏方役にまわってもらうことで、対象年齢を外れても「参加し続けたい」という熱意をすぐにつなげていくことが可能となっていることが分かった。

2019 年「ミニさっぽろ」に参加した小学校 3, 4 年生の子どもは、1 日目 1600 名、2 日目 1800 名ほど

表 4 「ミニさっぽろ」経験者へのスタッフインタビュー

属性			Q1.子どもの時、いつ参加したか。	Q2.なぜスタッフとして参加しようと思ったか。	Q3.来年も関わりたいか。
1	スタッフA	高1・F	小学校3, 4年生	ボランティアは2回目。水道記念館のボランティアをしていた時に、「ミニさっぽろ」の説明会の存在を知った。大学に行く時に、経験として書けるのと、楽しそうと思った。	参加したい。高校を卒業しても関わりたい。
2	スタッフB	高1・F	小学校3年生	地下鉄の掲示板に貼ってあった。自分が子どもの時に参加したことがあったので、サポート側にまわろうと思った。	来年もぜひ参加したい。
3	スタッフC	高1・F	小学校4年生	水道局の秋祭りのボランティアに参加した時に、主催者が他にこんなイベントあるよと紹介してくれた。	参加したい。
4	スタッフD	高1・F	小学校4年生	友人の紹介で知った。小学生の時にすごく楽しかった思い出がある。自分で働いて好きなモノが買える経験をした。子どもに関わるボランティアをやりたいと思っていたところだった。他のボランティアもしている。受験の時に自分の経験として入れられる。同じ高校からは8人ほどボランティアに来ている。	都合があれば参加したい。
5	スタッフE	高2・F	小学校3年生	ジュニアリーダーをやっているが、そこで「ミニさっぽろ」のボランティアがあるといわれた。	受験の状況次第。
6	スタッフF	高1・M	小学校3, 4年生	学校に求人案内があったので、友人を誘って来た。子どもの時に大人として参加してみたいと思った。当時高校生と話をして楽しかった。待っていることが長かったので、店番の大人にちょっかいをだしたりしていた。	参加したい。
7	スタッフG	高1・F	小学校4年生	ジュニアリーダーで案内があった。自分が子どもの頃に楽しかったので、手伝いをしてみようと思った。	参加したい。
8	スタッフH	大3・F	小学校3, 4年生	塾に通えない子どもに対する大学生のボランティア活動の場で募集を知った。見た瞬間、小学生の時に経験したのを思い出した。当時は、働いたお金でご飯を食べたりする経験がなかった。違う立場から「ミニさっぽろ」がみれると思った。	来年も是非参加したい。
9	スタッフI	大4・F	小学校3, 4年生	「ミニさっぽろ」実行委員の「活動協会」と知り合いで、ボランティアの誘いを受けて、子どもの頃にやったことがあると思った。	道内にはいるが、就職するので参加が難しい。
10	スタッフJ	高2・F	小学校4年生	今年友人に誘われて。ボランティアをやったことがなかったのでやってみたくった。子どもが好きというのもあった。	受験の状況次第。
11	スタッフK	高1・M	小学校3, 4年生	自分でネットで見つけた。子どもの頃に行ったことがあると思った。友人も参加しているが、別の経路で見つけてきていた。	参加したい
12	スタッフL	高3・F	小学校3, 4年生は不参加（小学校6年生にボランティア参加）	小学校6年生の時には、児童館で誘われた。小学校3, 4年生の時には「ミニさっぽろ」を知らなかった。つくる側や何かさせてあげる側にまわったら面白いと思って参加した。今回は、学校で募集がかかっていたので、今後進路で専門学校の方向に進むのに、何か書けるものがあるといいなと思ったのと、将来のために仕事をしている人と話ができると思ったことや、小さい子どもと関わる経験をしたかった。	来年もできれば。2回目なので、よりサポートができるようになる。

おり、どちらか1日のみ参加ができ、抽選で選ばれた者のみ来ることができる。かつてはプラチナチケットと呼ばれ、「ミニさっぽろ」のチケットが1万円で転売されることもあったが、近年は抽選に通っても参加費2500円を事前に支払う際にキャンセルする人も多く、参加枠に余裕がでることもある。そのため、多めに募集をしているようだ。ボランティアスタッフには1日1000円の経費を支払い、また会場費も1000万円を超えるため、資金調達には企業協賛なども含めて様々に苦勞しているという。

以上より、「ミニさっぽろ」からみえる「都市」の継続のポイントとしては、参加者をすぐにサポート側に循環させる機会をつくることや、資金面が赤字にならない工夫があることがうかがえた。

②とさっ子タウン

これは2009年より開催されており、2019年度は小学校4年生～中学校3年生400名を対象に2日間行われた。主催は、「とさっ子タウン」実行委員会、「(特非)NPO高知市民会議」、「高知市市民活動サポートセンター」、「(公財)高知市文化振興事業団」であるが、主な実働部隊は大学生を中心とする実行委員会が企画運営を行っている。「とさっ子タウン」の特徴として、実行委員会は大学生を中心に(1)だんどりユニット、(2)営業ユニット、(3)よろずユニット、(4)くいしんぼユニット、(5)こうてやユニット、(6)学生ユニットの6つのユニット⁴⁾に分かれて準備が行われる。

「とさっ子タウン」のスタッフは、1)専門家スタッフ、2)当日スタッフ、3)実行委員会スタッフがおり、2)3)は高校生から参加することができる。中には小学校4年生～中学3年生まで子ども側として参加し、翌年から高校生としてボランティア側にまわり、その後専門家スタッフとして関わる人もいる。

本調査でインタビューできたのは、計12名(高校生6名・専門学校生及び大学生6名)であるが、そのうちの1名は高知出身ではなく、小学校5年生の時に親に連れられて「とさっ子タウン」に遊びに来たことがある経験者であった(スタッフJ)。今回スタッフとして参加しようと思った動機として、子どもの頃に経験した場に再度関わりたいという者(スタッフA,C,F,K,I)や、実行委員の人が着用できるオレンジTシャツを着てみたかった者(スタッフA,I)や、スタッフの大人達から学びたいものがあると思っている者(スタッフB,I)がいた。

「とさっ子タウン」の特徴は、子どもに貴重な体験をさせる場の提供だけでなく、大学生等をターゲットとして若者も育てようとしているところにある。したがって大学生が中心となって「実行委員会」が組織され、実行委員長・副実行委員長も大学生が担当する。大人は主に裏方としてサポートしていく。多くの「遊びの都市」は、大人が実行委員会を組織して当日の企画運営や協賛金の手配なども全て大人が実施しようとする。そして若者がボランティアとして参加する場合は、当日のサポート程度の裏方を担当することが多い。しかし「とさっ子タウン」の場合は、一般的に大人が担っているような裏方の裏方の部分まで、大学生を中心とする実行委員会に任せていく、そのような構造が成立している。

したがって、「子どもに貴重な体験をさせる場」をどうサポートするか、「当日ボランティア」や「実行委員」の若者達に考えてもらい、大人は若者達がどうしたらそのような場を企画し実行できるかを見守る役をしている。これはバームクーヘンのような年輪の構造になっており、徐々に下の世代がスタッフとして参加してくるようになると、外側ポジションに移行していくことになる。したがってこのような構造があることで、高校生～大人までの幅広い年齢層の人々がスタッフとして参加している。

「遊びの都市」の継続という観点からみたときに、まず中学生としての対象年齢を外れても、高校生スタッフとしてすぐに裏方に参加できる機会があり、また大学生になっても関わり続けられる場が存在

する。また大学生が関わり続ける理由にもあげられていた、魅力的な大人にサポートされていることも組織づくりとして重要であることがうかがえた。しかし就職や進学などのタイミングで、高知を離れなければならなかったり、スケジュールがあわなかったりする場合は、継続して参加し続けることが難しくなるが、次回も「参加したい」という意思をもつ者が大多数であった。

以上より、昔の憧憬を思い返す場としてだけでなく、スタッフ側になっても新たな関わり続けたい魅力的な場であることが、「遊びの都市」の継続性には重要なポイントであることがうかがえた。

表5 「とさっ子タウン」経験者へのスタッフインタビュー

属性		Q1.子どもの時、いつ参加したか。	Q2.なぜスタッフとして参加しようと思ったか	Q3.来年も関わりたいか
1	スタッフA 高3・F	小学校5年生～ ～中学2年生	昨年当日参加のボランティアで参加した。今年は実行委員を希望した。子どもの時に、オレンジTシャツのお兄さん・お姉さんと地元のマツミさんに、「何して遊んだか?」と聞いてくれて、そちら側になれたらと思うていた。学校のボランティア募集で「とさっ子タウン」が載っていた。自分が楽しかった分、自分の代で終わるのではなく、繋ぎたいと思った。	参加したい。進学先が県外になっても帰ってくる。
2	スタッフB 大1・F	小学校4年生～ ～中学1年生	高校時代にスタッフとして関わった時に、「とさっ子タウン」がやっぱり好きだと思った。熱量の多い大人にも会えるし、子ども達とコミュニケーションができる。自分のためにもなるし、他の人のためにもなる。NPOの大人がサポートしてくれるけど、既存の枠にとらわれず、自分達でできることをやっていきたい。社会人になっても関わり続けたい。	参加したい
3	スタッフC 大1・F	小学校4、5 年生	自分が小さい時に行っていた場所がまだ残っていると思った。そこに関わってみようと思った。このイベントが利益のためにやっているわけではないと思っていた。何のために、どんな方針でやっているのか分かって、そういうことを一生懸命やっているイベントだと知った。実行委員長や副実行委員長を中心にまわっていて、同じ学部の先輩などがやっていてすごいと思った。	参加したい
4	スタッフD 大2・F	小学校3年生～ ～中学校3年生 (2009年2 月のプレも 来た)	現在は県外の大学にいるが、ずっと「とさっ子タウン」に来ていて、ここに来ることは夏の1つの決まりだった。大学に行っても関わり続けている人達の存在を知って、実行委員会に関わっている人も知っている。高校1、2年生の時は当日ボランティアで参加し、高校3年生の時と昨年の大学1年生の時は、実行委員会の一員として関わった。	難しい。(インターンシップに参加しないといけないため)
5	スタッフE 高2・M	小学校4、5 年生、中 学校1年生～ 3年生	中3の終わりに来年はスタッフとしてやりたいと思った。参加できなくなるのが嫌だと思った。「とさっ子タウン」で出会った友達も来年も来たいと言っていた。昨年の高校1年生の時には当日ボランティアとして参加し、今年は実行委員会に入って参加した。	参加したい。これがきっかけになり、子どものために何かをしたいと進路が変わった。
6	スタッフF 高2・M	小学校4年生～ ～中学校3 年生	昨年の高校1年生の時には当日ボランティアとして参加し、今年は実行委員会として参加した。自分が子どもの頃から参加してきた側で「とさっ子タウン」が忘れられないし、子どもの面倒を見たいと思った。	参加したい。進路は県外だが、スタッフとして関わり続けたい。
7	スタッフG 高1・F	中学校1年生～ 3年生	これまで参加者側として3年間来ていたので、このイベントが2日間で千円で運営できているのがすごいと思った。それもスタッフのおかげだと思った。	参加したい
8	スタッフH 高1・F	小学校4年生～ ～中学校3 年生	市民の時にもっとこうしてほしいという目安箱があり、そこに入れたかったが入れ方が分からなくて自分で考えていたら、スタッフの人が教えてくれた。帰る時もスタッフの人が手をふってくれるのがうれしかった。高校は忙しいので当日ボランティアだけの参加だが、大学生になったら県内の予定なので実行委員会に入りたい。	参加したい
9	スタッフI 大2・F	小学校3年生～ ～中学校1 年生(2009年 2月のプレも 来た)	昨年は当日ボランティアとして参加し、今年は実行委員会に入って参加した。子どもの頃は、大学生と大人達が企画しているイベントというイメージがあった。オレンジTシャツを着たいと思って、憧れていた。自分達がやってもらったことをやる側にまわりたい。楽しかった想いがある。実行委員の人達も楽しそうに活動しているのを子どもに見た覚えがある。昨年、大学生になったので、今までやりたかったことをやろうと思い、「とさっ子タウン」のボランティアに参加した。参加してみて、高校生スタッフも多く、年齢が違う人とも話せる場だと思った。年齢層が広く、大人からも学べる。同じ目的をもって、同じ空間にいる。困ったことがあると相談もできる。実行委員は色々な人と一緒に、当日の2日間に向けて1年間やっていく。最初は当日ボランティアで参加したので、当日の動きしか知らなかった。でも今は実行委員として準備段階から参加していて、今は私なりにできることが見えてきている。	参加したい(就職活動の状況による)
10	スタッフJ 大3・M	(小学校5年 生)	別の「遊びの都市」の出身だが、小学校5年生の時に「とさっ子タウン」に遊びに来た。大学進学で高知に来て、大人スタッフに誘いを受けた。	参加したい
11	スタッフK 高3・F	小学校5、6 年生	昨年の高校2年生の時に当日ボランティアとして参加し、今年から実行委員に入って参加した。こっこの裏方もやってみたくて参加した。姉が実行委員に入っているというのもあった。	参加したい。県外に進学してもスタッフとして関わり続けたい。
12	スタッフL 専門2・ M	小学校4年生～ ～中学校3 年生	高校1年生～3年生、専門学校2年間と、計5年間スタッフとして参加してきて、ここに毎年来ることに慣れていて、親が実行委員に入っているというのもあり、必然的にここに来ていた。中学校1年生の子どもの時から段ボール工場に働いていて、スタッフとしてもここに関わり続けている。	難しい(就職してしまうため)

③あいちマーブルタウン

これは2009年より岡崎で開催されており、2019年度は小学生を対象として2日間行われた。主催は、「コラボキャンパス三河」⁵⁾によるもので、この団体は「次世代の若者が挑戦・失敗できる場」の提供を軸に、学生向けのプロジェクトを企画・運営するNPO法人である。

当日の「あいちマーブルタウン」には、高校生や大学生がボランティアでサポートに入っていたが、子どもの頃からの経験者に出会うことができなかった。岐阜からボランティアに来ている人もいるなど、名古屋周辺の地域は他県や他地域にアクセスが容易であることから、他の興味等が見つかるにそちらに流れていってしまうこともある。つまりこのような交通事情の良い場所においては、経験者が継続的に関わり続けるのに、かなりの思い入れがあることや、関わり続けたいくなるような仕掛け、組織としての魅力等が必要となることがうかがえる。またそれを主催側がどの程度意識をして、その仕組みを組織化しているかにより、経験者が継続的に関われる場となるかどうかは左右されるといえる。

「あいちマーブルタウン」は、通貨「まーぶる」を用いており、「刈谷マーブルタウン」(愛知県)、「岐阜マーブルタウン」(岐阜県)、「どさんこマーブルタウン」(北海道)といったように他の地域にも同様の通貨と仕組みを用いた「遊びの都市」を展開してきた。これらは、「あいちマーブルタウン」に関わった学生達が、自分の地域・他の地域でも「遊びの都市」を開いてみたいという希望により、「コラボキャンパス三河」がサポートする形で開催されてきたものである。このようなサポートシステムがあると、学生自身が継続的に関わり続け、さらに「遊びの都市」を与えられたものではなく自分のものにしていく機会となっていくことがうかがえる。

以上より、「都市」の継続という観点からみると、主催団体の方針によっては、参加者の子ども達をサポート側に関わらせる場合と、若者に様々なチャレンジの機会を与える場合があることが分かった。何を重視するかは「都市」によって異なるが、人の移動が激しいエリアにおいては、同じ人が同じ場所に関わり続けることを望むよりも、今その場に関わる人達が力を身につけ、どこに暮らしたとしても自分自身の力を発揮できるようなキャリア教育の視点からプログラムが組まれていることがうかがえた。

④なごや★こども City

これは名古屋開府400年を記念して2010年に15日間開催⁶⁾されたのを始まりとしている。その後も、2016年から名古屋市の助成を受けるなどして、数日間の規模で実施されてきた。2019年度は小学生～高校生を対象として2日間行われた。申込者数は1574名おり、抽選で選ばれた1日目370名、2日目391名の合計761名の参加があり、その倍率は2倍であった⁷⁾。主催は「(特非)子ども&まちネット」であり、この団体は、「子どもにやさしいまちづくり」を掲げて、子どもや若者たちが参画や遊び、自立ができるように様々な体験プログラムを企画・運営している⁸⁾。

表6 「なごや★子ども City」経験者へのスタッフインタビュー

所属	Q1.子どもの時、いつ参加したか。	Q2.なぜ参加しようと思ったか	Q3.来年も関わりたいか	Q4.このイベントで大事にしていること
1 スタッフA (大2・F)	小学校4年生～高校3年生 (「だがねランド」も参加経験有)	学校には居場所感があまりなかったけれど、ここはやんちゃになれる居場所があったから、関わり続けている。高校生までは子ども実行委員だから間違いがあっても、子どものやっている事業だからと見逃される。去年からは大人として自分も大人な対応しないとけなくなった。子ども時代から関わっているかこそ言えることは、子どもも私も仲間という意識がある。	参加する	子ども実行委員会があること。大人がつくって当日呼ぶのと、実行委員会の子ども達がつくって当日を迎えるのでは差がある。でも実行委員の子どもと、当日初めて遊びに来た子の間には意識の違いがある。以前は子ども実行委員の子どもは店長として活躍してもらっていたが、今は自分の店だけでなく、他のところにも遊びに行ったり仕事に行きマチをみてほしいという想いがある。
2 スタッフB (大3・M)	小学校6年生～高校3年生 (瑞穂区や中村区の「都市」も参加経験有)	母親のつながりで他の地域の「都市」に遊びに行った。中学生の時は市内の様々な「都市」を掛け持ち状態で駆け回っていた。その中で、「なごや★子どもCity」を通じて子ども&まちネットの団体と出会った。	時期によっては参加できない可能性もある	あまりないかもしれない。この「なごや★子どもCity」自体が複雑な企画の中でできている歴史がある。名古屋らしさを深く考えるみたいなことはとくに現れていないと思う。このイベント自体も大きく形が変わるものではなくはなっている。しばらくもある。2019年から実施しているので、良い意味でも悪い意味でも根づいてしまっている感じがある。
3 スタッフC (大2・M)	高校1年生	高校生の時に「なごや★子どもCity」の実行委員の募集があり、生徒会の先輩に誘われてやってみようと思った。	介護体験などと重なり参加が難しい	子どもがやりたいことを本当にやれる場であるということ。またやりたいと言ってもいいということを否定しない。安心してその声を出せるようにする。

「なごや★子ども City」は、小学生～高校生までが参加するが、小学校5年生以上になると「子ども実行委員会」に所属することができ、企画側にまわることができる。

「子ども実行委員会」は7/27, 8/12, 9/7, 9/21, 10/14, 12/2, 12/7と11月の本番前後で7回にわたって開かれており、主に小中学生を中心に60名の子ども達が事前準備に関わる。7回の事前準備の中で子ども達は、「低学年や障害のある友達も参加するまち」について考えたり、出店ブースの企画を考えたり、見やすい看板をデザインしたりと、具体的に「都市」をつくることに携わっていく。「なごや★子ども City」の特徴としては、大人によって事前に準備された「都市」で遊ぶのではなく、参加対象である子ども達自身が「子ども実行委員会」などで「都市」づくりの準備をしていくことにある。

本調査でインタビューできたのは、計3名(大学生3名)であった。彼らは当日だけ来て遊ぶ子どもではなく、子ども実行委員として事前に「都市」を準備していく、マチをまわす立場の子どもとして参加していた。またスタッフA,Bの2名については、子どもの頃から名古屋市内の様々な「遊びの都市」をハシゴして遊んでいたようだ。スタッフとして参加しようと思った動機は明確にうかがうことができなかったが、高校生の時に子ども実行委員の立場で参加していると、その後も引き続き裏方スタッフとして参加し続ける状況が生まれることがうかがえた。それは、高校卒業後の進路によっては参加が難しい場合もあるが、進学先が県内や近隣エリアの場合は、高校時代の生活スタイルの延長として継続的に関わる場となる可能性がある。スタッフAが述べているように、高校を卒業してからは「なごや★子ども City」への関わり方など、これまでとの違いを認識はしているが、「子どもも私も仲間」と表現しているように、今の自分と今日の前にいる子ども達とが何らかの形で繋がっている感覚になっている。またスタッフBは「このイベント自体も大きく形が変わるものではなくはなっている」と述べているが、長く続いている「都市」は、当日初めて来る子ども達にとってみれば初めての「都市」であるが、何年も

通っている子どもやスタッフにしてみれば、また同じ「都市」にもなりうる。

以上より、ここが「遊び」の「都市」であるために、子ども実行委員から大人スタッフ側へ移動した人や、大人スタッフとして長く関わっている人などにとっても、マンネリを感じさせない工夫が、「都市」の継続において重要になることがうかがえた。

⑤ミニ山の都

これは「こうふ開府 500 年」事業の 1 つであり、甲府青年会議所による 2019 年度限りの取組みとして行われたものである。甲府青年会議所は、甲府市・甲斐市・中央市・昭和町を活動エリアとして、県内の若手経済人で構成されたメンバーが地域のために様々な活動を行う組織である⁹⁾。基本的には自営業の人が所属するが、会社側から派遣されて所属している人もいる。会員の 1 割が女性である。毎年「親子ふれあい写生大会」など子ども向けイベントが企画されており、2019 年度は「遊びの都市」を実施する計画を立て、2018 年 9 月頃から動き出したという。2019 年 3 月には日本の「遊びの都市」の初期段階から存在する「ミニさくら」にも見学に行ったようだ。大阪府吹田市でも「遊びの都市」活動が青年会議所主催で行われている様子を知り、それも参考にしながら実施する方向にしたという。また 10 年程開催されている山梨県南アルプス市の「キッズタウン」にも訪れ参考にしているようだ。

このような状況下で、「ミニ山の都」は 2 日間（1 日目 250 人、2 日目 280 人（100 人が 1 日目のリピーター）の子どもが参加）行われ、スタッフは青年会議所に所属する人によって構成された。

2019 年度限りの活動であるため、継続は見込まれないが、もし今後も継続されるならどのような関わり方をしたいか、スタッフ約 20 名のうちインタビュー可能な 5 名にうかがったところ、「保護者の存在への注意」（スタッフ C、D）、「子どもの活動内容の質の向上」（スタッフ B）、「スタッフの動き方」（スタッフ E）への提示があった。また仕事等の活動をしていない子どもに声をかけて質問をしたところ、23 名中 21 名が「また来たい」と回答し、来年の実施があれば店の数・種類を増やし（子ども E、F、H、I、J、K、L、N、P、T）、現状の「都市」を踏まえた提案をする様子（子ども A、Q、U、V）もみられた。

以上より「ミニ山の都」は、甲府青年会議所により今年限りで実施されたが、「次回はこうしたい」という継続への意識が子ども達やスタッフからうかがえた。

表 7 「ミニ山の都」の大人スタッフへのインタビュー

Q.来年も実施するなら、どのような「都市」にしたいか。どのような関わり方をしたいか。	
スタッフ A	来る子によって、どんな関わり方をするか、できるかも違うと思う。
スタッフ B	何もなくてもみんながやっているのが本質かも。友人とのやり取りとか知らない人のやり取りとかも大事だけど、食事ブースや PC ブースでのモノがあつての作業だけでなく、誰と何をどうやったのかが重要なのではないか。そのバランスが重要。
スタッフ C	今回は保護者が混ざっているが、保護者が入らないでも責任がもてる規模で実施できたら。そのためにはスタッフの数、参加人数を絞ることも必要。
スタッフ D	すごい反省はない。子どもとあまり関わらない方が良い。入った瞬間に大人が違う部屋に入るくらいの進入禁止に。親がいるから安心という雰囲気もあるが、子ども 1 人で乗り込んでいくようなところに価値がありそう。
スタッフ E	1 年で組織が変わる。次年度の計画も既に動いている。大人の動きは特に何も無いという事前情報だったが、色々やる事があった。最初は作業を教える人間、危ないところの注意をする人間、機械類のレンタル品を把握する人。想定以上にあった。子ども 20 人でしか動いていなかった。仕切ってもらったのが難しかった。他の団体を巻き込んでやったらどうか。

表8 「ミニ山の都」の子どもへのインタビュー

属性			Q1.来年も来たいか	Q2.来年はこんな店やブースが欲しいなどの要望はあるか
1	子どもA	小4・F	○	もうちょっと仕事を多くして、1つの仕事に人数多くならないように。今年は1日しか来れなかったの、来年は2日来たい。
2	子どもB	小5・F	○	ない
3	子どもC	小3・M	○	思いつかない
4	子どもD	小2・M	○	分からない
5	子どもE	小3・M	○	もう少し飲食店がほしい。大人がやり方を教えてくれて焼いたりするもの。
6	子どもF	小3・F	○	アイス屋さん、タピオカ、自分でジュースを注げる店
7	子どもG	小2・F	▲	ない
8	子どもH	小5・F	○	お化け屋敷、ヨーヨー
9	子どもI	小5・M	○	いらぬおもちゃを売っている店
10	子どもJ	小4・F	○	食べ物の店がもっと並んでいてほしい。商品を増やしてほしい。
11	子どもK	小5・F	○	看護師とかお医者さんとかの救護。将来ドクターヘリの看護師になりたい。
12	子どもL	小2・F	▲	ラジオ局
13	子どもM	小1・M	○	ない
14	子どもN	小2・F	○	スタンプづくり
15	子どもO	小5・F	○	ない
16	子どもP	小4・M	○	ポーリング、スポーツ
17	子どもQ	小5・M	○	昨日まであった駄菓子屋。みんなが買い過ぎて今日はなくなった。ストラックアウトの景品にしていたのでなくなったので寂しいと思う。
18	子どもR	小5・M	○	あまりない。喧嘩があった時のために裁判所。
19	子どもS	小5・M	○	あまりない
20	子どもT	小5・F	○	チョコバナナ
21	子どもU	小5・F	○	銀行にお金預けて、使いすぎないように使い分けできるようにしたい
22	子どもV	小6・F	○	食べるスペースを広くしてほしい
23	子どもW	小5・F	○	ない

⑥こども夢の商店街

これは（一社）ユメ・フルサトの主催によるもので、名古屋を中心に全国各地において年間30ヶ所ほどで開催されている。主催団体がホームセンターと繋がりがあることから、全国各地のホームセンターでこのイベントが展開されているという。

2010年頃より、地域活性化の仕掛けとして「おむすび通貨」の仕組みが提示されている。これは「こども夢の商店街」で子ども達が稼いだお金を、地域の提携店で使用できるというものである。主催者によれば、「遊びの都市」の元祖であるドイツのミニ・ミュンヘンも参考にしているという。したがって全く「遊びの都市」と無関係なわけではない。しかし日本の「遊びの都市」の多くは、リアルさよりも遊びを重視しており、このイベントが求めるのは働く厳しさや、お金が実社会で使えるといったリアルな体験であると考えているようだ。

通常子ども達は、出店する人以外は当日申込で参加し、1500人ほどが来場する。仕掛けや仕組みは主催者側が考えているが、ボランティアの学生も自分の担当の分野をより良くするためにスポンサー企

表9 「子ども夢の商店街」のリピータースタッフへのインタビュー

所属	Q1.いつから関わっているか	Q2.きっかけ、なぜ参加しようと思ったか	Q3.来年の参加
1 スタッフA (大4・M)	大学2年生の時	ゼミの先生が主催者と知り合いだった。有償のインターンとして参加した。インターンは5名おり、日程が重なった日に打ち合わせを行い、重なっていない日は主催者の方がタスク等を用意してくれた。その後、インターンで参加した5名は実行委員になった。	就職するので当日スタッフという形になるが参加した。
2 スタッフB (高3・F)	高校3年生の4月	たまたま学校にボランティア募集がきていた。中学生の時からボランティア参加していた。学生が色々改善案を提案できる。85人ほどが所属する学生どうしのLINEもある。	来年は就職だが、社会人でも来ている人がいるので、土日空いていたら行きたい。
3 スタッフC (大2・M)	大学1年生の5月	大学に入った時にボランティアをやりたいと思っていた。最初はそれほど密には関わっていなかったが、回を重ねていくごとにハマっていった。関東地方の実行委員の人にもよくしてもらい、各地のイベントに勝手に顔を出すようになった。実行委員には、高校生や大学生、大人など立場の異なる色々な人がいる。共通の子どもボランティアで知り合うということが面白い。このイベントをやっていなかったら出会ってなかった人達。	
4 スタッフD (高3・F)	高校3年生の7月 (今回で4地域、5日目)	友人に誘われて参加した。子どもが苦手だったが、一度参加してみても楽しかった。ここに参加するまでは、土日はダラダラと過ごしていたけれど、学校よりもこちらの方が素でいられる。もっとこのイベントを知って欲しいと思う。	進路が県内であれば関わり続けたい。

業へのプレゼンなどを提案できたりする。拠点である名古屋エリアにおける学生ボランティアは60名ほど登録されており、今回も名古屋から5名の学生ボランティアがやってきた。現地ボランティアとしては、山梨県の大原学園の保育系の学生が40人ほど参加していた。

この学生ボランティアの中に、ボランティアとしてのリピーター参加者がいたので、彼らを対象にインタビュー調査を行った。本調査でインタビューできたのは、計4名（高校生2名・大学生3名）であった。彼らがなぜリピーターのボランティア参加者となっているのかといえば、まずは開催数が頻繁であることがあげられる。他の「遊びの都市」は1年に1度の場合が多いが、このイベントはスタッフDにみられるように、7月～11月までに4地域でボランティアができていく。またスタッフB.Cのように学生どうしの他、年齢・立場の違う人どうしで交流できる「出会いの場」として捉えている者もいる。またスタッフAのように大人がタスクを用意してくれることや、スタッフDのように時間の過ごし方が変わったとあるように、これまでの生き方をステップアップさせてくれる場としても捉えられている。

以上より、学生ボランティアにとっては、そこに自分が関わることで得られる何かがあると認識されていることが、また関わりたい場になっていくことがうかがえた。またイベント自体が頻繁に開催されているため、何度もその関わり方を試すことができ、自分の成長等を実感できることが考えられる。

⑦キッズタウン南アルプス

これは2009年より「(一社)南アルプス青年会議所」によって企画されているイベントで、市内の仕事を子ども達に体験してもらい職業体験が軸になっている。北名古屋の商工会議所の青年部が発信していたキッズタウンの情報を参考にしたという。講師は毎年ほぼ同じで2019年度は11種類の仕事が提供された。子ども達は220名参加でき、午前・午後ともに110名ずつの参加で、予約の際に事前に仕事を

決めてくる。1 業種 1000 円で、午前中と午後続けて参加の場合は午前中 1000 円、午後 500 円である。午前・午後ともに開会式・閉会式が開かれる。各ブースには高校生がサポーターとして入っていた。

そこで高校生に具体的なサポート内容をインタビューした。3つの高校から高校1年生と3年生が集まっており、高校2年生は修学旅行で不参加であった。そのうちの1つの高校では生徒会に話が来て、教員を目指す生徒が誘われたという。また子どもの頃ここで遊んだ経験をもつ者がいるかどうかを探したが該当者はいなかった。サポート内容は「見守り」や単純作業等が多く、高校生のアイデアを提示するようなクリエイティブな機会はみられなかった。したがって高校生ボランティアの継続的な関わりという面からみると、現在のシンプルなサポート内容であっても、大人スタッフや職人との出会いや、子どもとの触れ合いなど自分なりに価値を感じることができれば、また次回も関わりたいと思えるかもしれないが、それが無い場合は単発ボランティアで終わってしまうことが予測された。

表 10 「キッズタウン南アルプス」の高校生の関わり

職業	スタッフ	高校生	実際の内容
美容師	2人	2人	高校生は、みつあみの補助や、はさみで指を切らないように見守る
はんこ職人	2人	1人	高校生は、押印の役をしたり、それ以外の時間は見守る
看護師	3人	3人	高校生は、とろみ食を一緒に食べたり、その他の時は見守る
そば打ち職人	2人	3人	高校生は、子ども達がそば粉をこねている時に鉢を押さえるなどの役をする
和菓子職人	1人	3人	高校生は、子ども達が和菓子を創っている際に、声をかけたり見守る
大工	6人	6人	高校生は、木材を運んだりチェアづくりのサポートを行う
ピッツァ職人	2人	2人	高校生は、アンケートを書いてもらったり、カメラ撮影したり、ピザのカットや箱に入れる補助をする
パティシエ	3人	2人	高校生は、椅子をひいてあげたりサポートをしていく
染物職人	2人	0人	
ドローンプログラマー	5人	0人	
銀行員	7人	0人	

(3) 「遊びの都市」への継続的な関わりとその考察（調査3）

以上みてきたように、「遊びの都市」に類似する活動も含めて7地域の調査を行ったが、全地域で若者スタッフを継続的に関わらせる仕組みは異なっていた。その仕組みとは、裏方スタッフとして活躍してもらう場をどのように設けているかということであり、主に3つの立場からの関わり方があることがうかがえた。

1つ目は、「A. 参加者として「都市」を考える」立場である。これは、参加対象者の子ども達が、「子ども実行委員」や「市長・市議会議員」等を通じて、どのような「都市」にしたいか考える機会が設けられているものである。「②とさっ子タウン」（小学校4年生～中学校3年生）、「④なごや★子どもCity」（小学校5年生～高校3年生）、「⑤ミニ山の都」（小学校4年生～6年生）の3地域にみられた。

2つ目は、「B. 経験者+サポーターとして「都市」を考える」立場である。これは、参加対象の年齢を外れてもスタッフとして裏方に回って関わり続ける仕組みが設けられているものである。「①ミニさっぽろ」（小学校5,6年生、高校生、大学生）、「②とさっ子タウン」（高校生～）、「④なごや★子どもCity」（大学生～）、「⑦キッズタウン南アルプス」（高校生～）の4地域にみられた。

3つ目は、「C. 未経験者+サポーターとして「都市」を考える」立場である。これは、子ども時代に「遊びの都市」に参加したことはないが、ボランティアスタッフとして参加することができる仕組みが

設けられているものである。「⑤ミニ山の都」を除けば全ての地域でこのような参加形態となっていた。「⑤ミニ山の都」は、主催団体が特定の組織となっており、その組織の人がボランティアスタッフを兼ねていたことから、それ以外の人々が自由にスタッフとなれる状況ではなかった。

表 11 「遊びの都市」への継続的な関わりの仕組み

	A. 参加者として 「都市」を考える	B. 経験者＋サポーターとして「都市」を考える	C. 未経験者＋サポーターとして「都市」を考える
①ミニさっぽろ		○	○
②とさっ子タウン	○	○	○
③あいちマーブルタウン			○
④なごや★こども City	○	○	○
⑤ミニ山の都	○		
⑥こども夢の商店街			○
⑦キッズタウン南アルプス			○

以上より、本研究で注目してきた「遊びの都市」に継続的に関わる仕組みとして、子ども時代に遊んだ経験者が関わりつづけることができる状況は多くの地域で存在していた。このように経験者が関わりつづけることは、「誰にとって」どのような住まいの教育への効果があるのだろうか。「誰にとって」については、「(1) 参加している子どもにとって」「(2) スタッフとして参加している経験者にとって」「(3) スタッフとして参加している未経験者や地域の大人にとって」といった3つの見方がある。以下では本調査を踏まえた3つの見方についての考察を加えたい。

「(1) 参加している子どもにとって」、かつてそこで子ども時代に遊んだ経験者が関わりつづけることは、子ども自身にとっての将来のロールモデルとなることがうかがえる。例えば「②とさっ子タウン」のスタッフにもみられたように、子ども時代に「あのオレンジのTシャツを着て自分もサポート側にいつか立ちたい」と思うきっかけになりうるのである。また「①ミニさっぽろ」のスタッフにもみられたように、ブースで待っている時間が長かったが大人の人と話をしているのが楽しかったという経験を覚えているように、経験者は「遊びの都市」を子ども側の立場から知っている。そのような人々によって場が支えられていくことは、より子ども目線に立った「都市」づくりに貢献することが考えられる。

「(2) スタッフとして参加している経験者にとって」、対象年齢を外れても関わり続けられる場所が存在することは、自分が過ごした場所を客観的にみていくことになる。これは、子ども側の立場だけでなく、サポート側に立つことで、自分がかつて居た場所はどのようなところであったのか再度検証する機会となる。つまりスタッフとして参加することで、子どもの時に楽しかった経験を再度追体験し、その先に、裏方としての楽しい経験が発見されると、「遊びの都市」が「かつての場」だけでなく「いまの場」ともなっていく。例えば「②とさっ子タウン」のように県外に進学・就職したとしてもイベント当日には戻ってきたいと思うような魅力的な場であることや、「③あいちマーブルタウン」のように学生がチャレンジしたいことをサポートしてもらえる場であると、さらなる継続的な関わりが見込める。これは子ども時代に「遊びの都市」を経験していない者であっても、同じことがいえるだろう。したが

って、スタッフを単に子どもの安全を見てくれるだけの存在として主催者側の論理で扱うのではなく、スタッフがどのようなニーズや意識をもっているのかを踏まえて関わってもらうことが魅力的で継続的な組織づくりに繋がるといえる。

「(3) スタッフとして参加している未経験者や地域の大人にとって」、「遊びの都市」を経験した者は、「都市」づくりをする上での「参考人」となる。子どもの立場を知っている経験者は、「遊びの都市」において子どもが何が嫌で何が良いと思うのかを知っている。この「参考人」をどのように組織に取り込み、活躍してもらうかは、主催団体の方針に左右される。現在は「遊びの都市」が全国的に広まり、10年以上開催されている地域もあるが、今後もよりよい形で継続されていくためには、遊ぶ子ども側の立場から新たなアイデアを提供し組織をよりよい方向にバージョンアップしてくれるマンパワーが必要となる。その時に「経験者」という存在は、過ごした場所に恩返しをしたい者が多く、「自分事」として関わってくれる人材となりうる。彼らは「遊びの都市」を「子どもにとって」よりよい場となるよう発展させてくれる存在として期待できるのである。

以上みてきたように、「遊びの都市」の経験者が裏方スタッフとして戻ってくることは、地域の子ども達に「遊びの都市」をよりよい場として提供することに繋がる。よりよい場とは、子どもの声に耳をかたむけて子ども自身で楽しい「都市」をつくれるようにすることである。子ども・若者の意見を地域づくりに採用していくことを「子ども・若者の参画」というが、「遊びの都市」はその考え方を実践・試走していく場となっている。実際に私たちが住んでいる都市には様々な人が暮らしている。都市はマジョリティの意見が通りやすく、弱者の声が届きにくい。だからこそユニセフが提示する「子どもの権利条約」にみられるように、「参加の権利」や「意見が尊重される権利」といった子どもや若者の声を聴くことが重要であり、それを地域づくりや政策に反映する動きは世界中でみられるようになってきた。しかし、意見を表明する側も、また表明できるようにサポートする側も訓練が必要である。「遊びの都市」は、その意見表明のパフォーマンスをする場であり、それが継続的に続いていくことで、子どもや若者は意見を表明でき、また彼らをサポートする大人もより上手にその支援ができるようになることが考えられる。

少子高齢社会で自助・共助・公助といった言葉が提示されている中、その人自身が考える価値観や力が活かされながら様々な方面に必要な支援がなされていくことは、子どもから大人まで全ての生活者にとっての権利といえる。「遊びの都市」はその力を育む場となりうる。したがって子どもにとっても関わるスタッフにとっても「遊びの都市」が魅力的な場として継続しつづけることは、実際の都市で子どもや若者が意見を表明したり、そのサポートが行われたりするのためのステップの場が保障されていると捉えることができる。現在は「遊びの都市」を通じてそのような社会に向けた助走がなされている段階といえるのではないだろうか。

3 今後の課題

日本では「遊びの都市」が多くの地域に広がっているが、一時的な開催で終わってしまうものも多く、子ども環境としてそれをどう評価していくのか考える段階にきている。なぜなら「遊びの都市」のメイン参加者である小学生の子ども達は、普段は校区内で生活することが多く、行動範囲に制限がある。自力で行動できる範囲に「遊びの都市」のような遊び場や居場所があることは、子ども時代をより良く過ごすために必要である。

「遊びの都市」が全国的に波及していくことは子ども環境の充実において大変評価すべきことではあるが、次のステップとして今後これがどう維持・継続されていくのか、さらに検討されていく余地があるといえる。その維持・継続について、大人だけで行うのではなく「子ども・若者の参画」を促して、どのように「都市」づくりを行い、後継者を育むのか、そして組織としての新陳代謝を活発にするのかが問われている。より良い「都市」づくりについて、「遊びの都市」の元祖であるドイツの「ミニ・ミュンヘン」や、世界の「遊びの都市」との比較の中で、日本の「遊びの都市」を位置づけていくことが今後の課題として残されている。

◆参考文献・参考 URL 一覧

- 1) 木下勇、卯月盛夫、みえけんぞう編著『こどもがまちをつくる 「遊びの都市—ミニ・ミュンヘン」からのひろがり』萌文社、2010年
- 2) 2010年に把握されている29地域の「遊びの都市」のうち、2019年時点も継続している15地域の参考URL（最終閲覧2020年3月30日）

名称	URL
1 仙台こどものまち	https://sites.google.com/view/sendaikodomonomati/home
2 ミニさくら	https://www.facebook.com/events/%EF%BD%8E%EF%BD%90%EF%BD%8F子どものまち/ミニさくら2020/766609457165254/
3 ミニいちかわ	https://www.kodomobst.org/info/8240.html
4 こども四日市	https://www.facebook.com/events/1388093194682369/
5 ミニたまゆり	http://minitama.jp/index.html
6 ミニさっぽろ	https://www.mini-sapporo.com/
7 ピノキオマルシェ	https://pinocchiopj.jimdofree.com/
8 ミニヨコハマシティ	https://minicity-plus.jp/miniyoko-blog/
9 なごみん横丁	http://station.okazaki-lita.com/works/detail/487
10 ミニたからづか	http://www.city.takarazuka.hyogo.jp/kanko/event/1000039/1027398/1027402/1012711.html
11 ミニまつぶし	http://www.town.matsubushi.lg.jp/www/contents/1582091709680/simple/4.pdf
12 ミニ★大阪	http://mini-oosaka.sakura.ne.jp/2016/v-3/index.html
13 こどものまち高砂	http://kodomonomachi.com/
14 イッツアスモールCBT	www.c-b-t.net/
15 とさつ子タウン	https://tosacco-town.com/

- 3) 本研究の調査対象の7つの「遊びの都市」の参考URL（最終閲覧2020年3月30日）

名称	URL
①ミニさっぽろ	https://www.mini-sapporo.com/
②とさつ子タウン	https://tosacco-town.com/
③あいちマーブルタウン	http://cc-m.blog.jp/archives/20114389.html?fbclid=IwAR02a5j4ztI17Dh0Q_vCW47wlf-gmDgRHtmQt_jqZZUiL1H8tv0kcbEqYoBU
④なごや★こどもCity	https://607cb1bd-616f-43a2-96cf-6c43dfdb94ab.filesusr.com/ugd/140b82_ed93e6bf5c5d42fbaa9e7d62749f0608.pdf
⑤ミニ山の都	http://www.kofu500.com/event/ev2019/20190914miniyama.html
⑥こども夢の商店街	https://www.f-money.com/event/34/report
⑦キッズタウン南アルプス	https://kidstown.space/

- 4) とさつ子タウン <https://tosacco-town.com/staff/>（最終閲覧2020年3月30日）
- 5) コラボキャンパス三河 <https://www.cc-m.net/>（最終閲覧2020年3月30日）
- 6) なごや★こどもCity2010 <http://network2010.org/nc400/event2/kodomocity20100808.html>

(最終閲覧 2020 年 3 月 30 日)

7) 2019 年度 なごや★こども City 報告書 <https://www.758kodomo.city/2018> (最終閲覧 2020 年 3 月 30 日)

8) 子ども&まちネット <http://komachi-111.com/> (最終閲覧 2020 年 3 月 30 日)

9) 甲府青年会議所 <https://2020.kofujc.com/about> (最終閲覧 2020 年 3 月 30 日)